

『イエス様が称賛された信仰』

'21/03/07

聖書箇所: マルコの福音書 7章 24-30節 (新約 p.79)

新約聖書で、「信仰」という言葉を検索してみると、結構な回数で、イエス様が、あなた方の「信仰が薄い」とか、「不信仰だ」とか、「あなた方の信仰はどこにあるのですか?」というような…、まあ、どちらかと言うと否定的なコメントが多いことに気付かされます…。しかし、そんな中であって、今日、私たちが学んでいこうとしているみことばには、『あなたの信仰はりっぱです。』(マタイ 15:28)というような…、イエス様からの“称賛”とも言い得るような信仰を見ることができます。

命題: あのイエス様が称賛された信仰とは、どういったものだったでしょう?

そこで、今日は、いつも学んできているマルコ伝のみことばと、その平行箇所であるマタイ伝 15章のみことばも参考にしながら、あのイエス様が称賛された信仰とは、一体、どのようなものだったのか? というテーマでもって、聖書のみことばを学んでいきたいと思います。願わくは、今日このメッセージを聞いてくださった皆さんが、一体、どういったような信仰をイエス様が喜んでくださるのか? ということを理解することができ…、私たちの信仰が、少しでも、イエス様の喜ばれるようなものへと変わっていくことによって、私たちの救い主であられるイエス・キリストの栄光が現わされていくことを願います。どうぞ、今日のみことばである、マルコ 7:24-30 をお開きください。そこには、このように記されています。

24 イエスは、そこを出てツロの地方へ行かれた。家に入られたとき、だれにも知られたくないと思われたが、隠れていることはできなかった。

25 汚れた霊につかれた小さい娘のいる女が、イエスのことを聞きつけてすぐにやって来て、その足もとにひれ伏した。

26 この女はギリシヤ人で、スロ・フェニキヤの生まれであった。そして、自分の娘から悪霊を追い出してくださるようにイエスに願いつづけた。

27 するとイエスは言われた。「まず子どもたちに満腹させなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです。」

28 しかし、女は答えて言った。「主よ。そのとおりです。でも、食卓の下の小犬でも、子どもたちのパンをいただきます。」

29 そこでイエスは言われた。「そうまで言うのですか。それなら家にお帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました。」

30 女が家に帰ってみると、その子は床の上に伏せており、悪霊はもう出ていた。

I・偶像ではなく、イエス様へ願いを持っていった! (24-26節)

さて、ここのみことばから、まず、最初に確認していただきたいことは、この母親は、「偶像」ではなく…、「イエス様」のところへ、その願いを持っていった! ということであります。まずは、そういったことを一緒に確認していききたいと思いますので、どうぞ、今読んだみことばの内、24-26節の部分に注目してみてください。

●ツロやギリシヤ、スロ・フェニキヤといった地域の 特徴

まず、24節を見てみますと、この時、イエス様は一旦、ガリラヤを離れて、『ツロの地方に行かれた…』とあります。24節後半に、『だれにも知られたくないと思われた…』とありますのは、恐らく、この時、イエス様は、弟子たちに休養を取らせ…、また、彼らの“訓練のための”時間を取ったのではないかと考えられます。しかし、この時も、イエス様のもとに、ある1人の母親がやって来ます。

その母親の、小さい娘は、この時、『汚れた霊』、つまり、『悪霊』に憑かれていたようです。そこで、この母親は、何とか、自分の娘から悪霊を追い出してほしいということで、イエス様のところへとやって来たわけですが、26節を見てみますと、「この母親はギリシヤ人であった」ということですから、恐らく、この母親は、流暢なギリシヤ語を話していたのでしよう。それと、この母親の出身は、『スロ・フェニキヤ』であったという情報が記されています。…さて、こういったことから、何が分かるでしょう?

実は、このツロとか…、ギリシヤとか、スロ・フェニキヤという地域は、偶像…、つまり、石や木で作られただけの“偽物の神々”が盛んな場所でありました。…どうぞ、前の画面を見ていただきたいのですが…、『ツロ』や『スロ・フェニキヤ』と言いますのは、ガリラヤから見て、その北西方面にあります。この辺りは、別名カナンとも呼ばれていて、現に、並行記事であるマタイ伝には、『カナンの女が…』という風に記されています。多分、皆さんも、よくご存知だと思います。実は、旧約の時代、あのカルメル山で、預言者エリヤが、バアルという、偶像に仕えていた預言者たちと信仰の戦いをしましたが、あいつ場所が、実は、このカナンであり、ツロであったのです…。

今日のみことばでイエス様が訪問された地域は、多分、現在で言うところの、シリアやレバノンの辺りになるかと思われます。それと、ギリシヤというのは、そこから、さらに、もっと北西方向にあって、この地図には表示されていません。

多分、皆さんも、「ギリシヤ神話」の全能神ゼウスだとか、アポロンだとか、アルテミス、ポセイドンなどといった神々の名前をお聞きになったことがあると思います。こういった神話は、実は、はるか紀元前何世紀といったような、大昔から伝承として伝わっていたそうです。

●この母親が選んだ 選択

つまり、私が今、何を言いたいのか? と言いますと…、間違いなく、この当時、この母親の周りには、たくさんの偶像と言うか、たくさんの信仰…、あるいは、宗教があったはずなのです。…にも関わらず、この時、この母親は、自分の小さな娘が悪霊に憑かれているということで、その問題と言うか、彼女の1番の願いを、近くにあった偶像の神々のところではなくて…、イエス様のところへ持っていったのです。実は、こういった点が、まず、この母親の信仰が優れていた点であります。

実は、ここのみことばの平行箇所であるマタイ伝を見てみますと、この時、この母親は、イエス様のところへ行くに当たって、『主よ! ダビデの子よ! 私をかわれてください! 娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです。』(マタイ 15:22)ということをお呼びながら、その娘のことを願いつづけたという風に記されています。正直言いますと…、この当時、しかも、外国に住んでいたであろう、この母親が、救い主イエス様に関して、どの程度の理解を持っていたのか、詳しくは分かりません。

しかし、マタイ伝のみことばによりますと、少なくとも、この母親は、イエス様がダビデの子であるということを知っていました。恐らく、この母親は、「ダビデの子」という称号が、特別な意味…、つまり、約束の救い主を指しているという理解を持っていたように思われます。

だから、彼女は、イエス様に対して、『主よ!』という風に呼びかけたのではないのでしょうか? …いつも言いますように、この言葉(κύριος)は、主に、真の神様を指す時に使われる言葉です。もちろん、この言葉は、真の神様以外にも…、例えば、奴隷が、そのご主人様に対して呼びかけたり…、あるいは、奥さんが、自分の夫を呼ぶ時に使ったり…、あるいはまた、時の王様や皇帝を指す場合にも使われたりしたそうです。…しかし、イエス様は、この女性のご主人様でも、夫でも、あるいは、支配者でもありませんでしたよね? …そういったことから、この女性は、イエス様のことを信じる信仰を持っていたと考えることができます。だから、彼女は、この時、自分の娘に関する切実な願いを、イエス様のところへと持っていったのです!

真の神様とは違って…、私たち人間が作り出す、偶像の数には限りがありません。…と言いますのも、私たち人間の抱えている問題やニーズ、あるいは、欲望というものには、「尽きる…」ということが無いからです。私たち人間の願いは、やれ、交通安全や無病息災…、家内安全に大願成就、商売繁盛に、合格祈願…、その他、良縁成就、安産祈願というように、挙げていくと、もうキリがありません…。

そういった中で、ひょっとしたら、私たち日本人は、1つ1つの専門分野に長けた神様がいる！と考えるしまっているのかも知れません…。しかし、本当に、そうでしょうか？本当に…、交通関連を専門とする神様や…、また、病気の分野に特化したような神様がおられ…、それぞれに、その得意分野があって…、私たちは、その願いの種類をちゃんと見極めて…、その願いに応じた神様のところへ行かないといけなのではないでしょうか？そんな神様が、果たして、私たちの周りに実在するのでしょうか？…いえ、そもそも、それって、本当に神様なのでしょうか？…皆さんは、どう思われます？

実は、私は、そのような存在は、聖書のみことばが教えてくれている、『**偶像**』であって、偽りだと思っています。そのようなものは、私たち人間が勝手に作り上げた存在であって…、正直、そのようなものにすがっても、何の意味も無いように、私は思っています。…皆さんもご存知のように、私の場合、今から、35年以上も前、私の母が脳卒中で倒れた時、私たちの家族は、一生懸命、大きな神社の神様にすがって、何度も、お百度詣りに行きました…。また、ある時は、「家相(かそう)」と言って、家の向きや間取りなどによって、運勢を占ってくれるような人にすがったこともありました…。でも、何の効果も、何のご利益もありませんでした…。

正直、私の母の場合は、そうでしたが…、でも、もし、その時に、たまたま、母の病が癒されていたら、ひょっとしたら、私は、「この神様が癒してくださった！私の願いを叶えてくださった！」と思いついていたかも知れません。もし、そうなら、私は今、牧師ではなくて…、神主になっているかも知れません(苦笑)。もちろん、それは冗談ですが…、でも、果たして、私たちは、そういったようなことで、神様の良し悪し？神様が居る居ないということを決めてしまっても良いのでしょうか？本当に、この神様が、その病を癒してくださったのかどうか？そういった検証をすることなく…、ひょっとしたら、たまたま、タイミングがあっただけかも知れないような…、そんないい加減なことで、たった1度しかない、自分の人生を左右されてしまっても良いのでしょうか？皆さんは、いかがでしょう？

例えば、皆さん、ご存知ですか？その昔、「オウム真理教附属病院」なんていう病院があったことを…。私も、先日、ネットで調べていて、思い出したのですが…、今から30年程前に、東京都の中野区にあったらしいです。オウム真理教の宣伝用新聞であった、「契約の書」によりますと、何と、この病院の治療によって、「クモ膜下出血の後遺症から奇跡的に回復…、末期癌が完治…、肝炎・肝硬変が改善…」したという話'があったらしいですが…、それらは皆、嘘っぱちだったわけです…。

オウム真理教だけではなく、これまた、30年近く前に活動していた、「法の華三法行」というカルト宗教の団体も、「足裏診断と称する個人面談」を利用して、「前生の悪い因縁を放っておくとガンになる…、このままでは2001年に人類は滅亡する…」などと、マニュアル化された脅し文句を使って、信者を勧誘していたそうです²。でも、そういったような話は、ここ日本には、ゴマンとあります。

でも、だからこそ、私たちは、一体、どれが本物で…、どれが偽物なのか？ということと、よくよく考えて…、しっかりと吟味しないといけないのです！…今日のみことばに出てくる、この異邦人の女は、そういったような偶像の神々がたくさん存在する地域に居ながら…、自分の娘が癒されるために、イエス様のところへと行ったわけなのです。どうか、皆さんには、そういったことを理解していただきたく思います。

¹ Wikipedia の「オウム真理教附属病院」から

² Wikipedia の「法の華三法行」から

II・熱心 でありながら、謙虚 でもあった！(27-28 節)

そうして、その次に、今日のみことばが教えてくれていますことは、この母親の熱心かつ、へりくだった言動であります。この母親は、多くの信仰者たちが、なかなか、その両方を持ち合わせる事ができないような…、“熱心”でありながら…、それと同時に、“謙虚”でもあった！のです。次に、そういったことを確認していきたいと思えます。どうぞ、もう1度、今日のみことばの、27-28 節をご覧ください。

27 するとイエスは言われた。「まず子どもたちに満腹させなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです。」

28 しかし、女は答えて言った。「主よ。そのとおりです。でも、食卓の下の小犬でも、子どもたちのパンくずをいただきます。」

●この母親の熱心さ

娘のために…、必死になって、あわれみを請い続ける母親に対して、イエス様の態度はどうであったでしょう？⇒実は、並行個所であるマタイ伝の方を見てみますと、この時、イエス様は初め、この母親の訴えを無視しておられたように見受けられます…。もし、そうだとすると、この時のイエス様は、非常に冷たい態度を取られているように思えます。でも、皆さん、考えてくださいますか？…正直、私は、ここの場面以外で…、真剣かつ、正しい態度でもって、何かを願っている者に対して、イエス様がこんな冷たい態度を取っておられるのを見たことがありません。じゃあ、一体、これは、どうしたわけなのでしょう？

実は、その理由はすぐに分かります。イエス様は、ちゃんと、この母親の願いをきいて…、その娘を癒してくださったからです。イエス様は、この母親に対して、嫌がらせであるとか、何かの意地悪をされたのではありません。…と言いますのも、皆さん、覚えてくださっていますか？この少し前、イエス様は、あの 12 弟子たちの訓練をされていて…、彼らのことを試すために、敢えて、イエス様は、意地悪に見えるような質問をされたり、あるいは、難しい状況を作ったりされたでしょ？私が思いますのは…、恐らく、この時のイエス様も、この母親の「熱心さ」を明らかにするために、わざと、一見すると冷たく見えるような態度をお取りになったのではないのでしょうか？

熱心に頼み続ける母親に対して、イエス様は、こうお答えになられます、『**まず子どもたちに満腹させなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです。**』って…。ここでイエス様がおっしゃった『**子どもたち**』というのは、イスラエルのことを指しています。これは、つまり、自分が遣わされたイスラエルのことを放っぱりだして…、それ以外の民、つまり、異邦人の方に行くことはできない…ということです。実は、この当時、イスラエルの民たちは、異邦人たちのことを、軽蔑の意味を込めて…、「犬」(κύων)呼ばわりしていたのですが…、ここで、イエス様は、それに引っかけて、異邦人たちのことを指すのに、『**子犬**」(κυνάρτιον)という表現を使ったのだらうと思われれます。この言葉は、そう悪い言葉ではありません。しかし、それでもまだ、この母親は引き下がろうとはしませんでした。つまり、それほど、この母親は、子どものために必死になっていた、ということが分かるのです。

イエス様は、そういった例えを使って、ご自分が、この地上に遣わされてきた、「1番の目的」について教えてくださいました…。天の神様の御計画は、この地上のすべての民たちが救われるための、救いの道を備えることであります。実に、そのために、神は、まず、アブラハムと、その子孫であるイスラエルの民たちを選ばれたのです。しかし、それは、決して、イスラエルだけが、神の憐れみを受けるためではありません。そのことを確認していくために、どうぞ、皆さん。創世記 12 章をお開きください。

創世記 12:1-3、『**主**』はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の

家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。』

⇒いかがです？皆さん、気付いてくださいました？…特に、3節の後半部分です。そこに、『地上のすべての民族は、“あなたによって”(＝アブラハムの信仰によって)祝福される。』とありますよ。ここに、はっきりと書かれてありますように、神が、アブラハムやその子孫であるイスラエルの民たちを選ばれたのは、アブラハムと、その子孫だけを救って、彼らに“だけ”恵みを授けようとしたからではありません。神様が願っておられたことは、イスラエルの歩みを通して…、たくさんの「神々」と名が付くものが存在する中で、そのイスラエルのことを顧み…、そのイスラエルを導いてくださっている、真の神を、『地上のすべての民族』が知って…、その者たちが皆、神と共に歩んでいくためなのです！

神は、そのために、約束の救い主であられるイエス様を、アブラハムの子孫…、また、ダビデの子として遣わして下さったのです！イエス様は、そういったことをおっしゃっておられるのです。しかし、この異邦人の母親は、そのイエス様の言葉を聞いても、すぐには引き下がろうとはしませんでした…。

今日のみことばの28節にありますように、この母親は、すぐに諦めようとはせず、しつこく、イエス様に頼み続けます。しかも、それだけではありません。実は、マタイ 15:25 には、欄外の注釈にも書かれてありますように、「ひれ伏す(とか)、拝む(つまり、)礼拝する…」とも訳せる言葉が使われているのです。…何度も繰り返しますが、つまり、この異邦人の女は、イエス様に対する“信仰”を持っていたのです。

●この母親の謙虚さ

今日、それと同時に、注目したいことは、この母親の持っていた、「謙虚さ」であります。…と言うのは、この母親に限らず、私たちも皆、様々なことを、神様に願う時、「熱心に」祈るからです。皆さんもそうでしょう？…間違いなく、私だけでなく皆さんも、これまでに何度も、いろんなことを熱心に祈ってこられたはずですよ。

でも、果たして、そこに、この母親のような…、「謙虚さ」、つまり、へりくだりというものを、皆さんは持ち合わせていたでしょうか？考えてみると…、この母親の態度は、初めから、謙虚でありました。例えば、この母親は、イエス様のところへ行った時、すぐに、イエス様の足元に『ひれ伏した…』ということを今日のみことばは教えてくれています。

そうして、その後、イエス様が発せられたのは、『まず子どもたちに満腹させなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです。…』という、ひよっとしたら、自分たちのことをさげすんでいるのか？とも思えるような言葉です。

しかし、それに対しても、この母親は、28節、『主よ、そのとおりです。でも、食卓の下の小犬でも、子どもたちのパンぐずをいただきます。』』と言って…、イエス様のお言葉を肯定しつつも…、何とか、その憐れみの…、恵みのおこぼれだけでもいただけないでしょうか？と言って、しつこく食い下がります。皆さん、気付いてくださいます？…この時、この母親は、「自分たちは、私たちは、子どもたちの次で良いです」とは言わず、「私たちは、その子どもたちがこぼした、“パンぐず”で良いのです…」みたいなことを言っているでしょ？…よく、この母親が短気を起こして、帰ってしまわなかった…と思われませんか？それは、この母親が、ただ熱心であっただけでなく…、それと同時に、謙虚でもあったからです！

しかし、現実問題として、私たちの多くは、なかなか、謙虚さというものを持ち合わせてはいません…。一見、謙虚であるように見せることはできても、心の底から…、本心で、謙虚であるということは、なかなか難しいものです。だから、私たちは、自分の願いが聞き入れられないと、「もうええわ！」と言って、諦めてしまったり…、「もし、神様が、私の願いを聞き入れてくださらないのなら、もう～しません！」などと言っ

たりして、まるで、神様を脅迫しているかのような態度を取ってしまったりするのではないのでしょうか？

ひよっとしたら、私たちは、心のどこかで、「神様は、自分の願いを聞き入れてくれて当たり前！自分のことを、神様が救ってくれて当たり前！」などと…、傲慢にも考えてしまっているのではないのでしょうか？…しかし、この異邦人の母親は、決して、そうは思っていなかったのです！そういったところが、この母親もっていた信仰が素晴らしかった点であります。

Ⅲ・イエス様に対する、大きな「信頼」があった！(29-30節)

そういったことが、今日最後の、3つ目のポイントにも繋がっていきます。この異邦人の母親が…、その信仰が素晴らしかったのは、そのような謙虚さだけではありません。彼女の信仰には、イエス様に対する、大きな「信頼」があった！のです。最後に、そういったことを確認していきたいと思しますので、どうぞ、今日のみことばの29-30節をご覧ください。そこには、こうあります。

29 そこでイエスは言われた。「そままで言うのですか。それなら家にお帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました。」

30 女が家に帰ってみると、その子は床の上に伏せており、悪霊はもう出ていた。

●この時、イエス様が母親に対して、おっしゃられた内容

⇒皆さん、このみことばを読んで…、何か、違和感がありません？…と言いますのは、この母親は、悪霊につかれた娘のために、必死になって…、ここまで、イエス様に食い下がってきたわけですよね？それなのに、イエス様は、その母親に向かって、「家に帰ってご覧なさい！」とおっしゃられたのです。しかも、この母親は、そのイエス様のお言葉を信じて…、信頼して、帰って行ったというのです。すると、イエス様のお言葉通り、その娘が癒されていた、というわけです。

正直言って、皆さんもご存知のように、私はどちらかと言うと、疑い深い性格をしています。そう、時々、言いますように、私は、「安全なはずの石橋でさえ、慎重に安全かどうかを確認して、とうとう、それを壊してしまうほどの慎重派」なのです。でも、そんな私でなくても、この時の母親の行動には、実は、驚くべき点があります。

だって、皆さんも分かっていますでしょ？…この時、この母親は、イエス様から、「悪霊は、もうあなたの娘から出ていきましたよ！…だから、安心して、帰りなさい…」と言われるわけです。…もしも、皆さんが、この母親の立場だったら、安心して帰れます？…多分、私だったら、何とか理由を付けて、イエス様に同行してもらおうと思います。…多分、多くの方もそうではないでしょうか？…でも、この母親は、そうはしないで、イエス様のお言葉を信頼して、帰っていったというのです！…驚きませんか？

今日のみことばの平行箇所であるマタイ 15:28 には、こう記されてあります、『そのとき、イエスは彼女に答えて言われた。「ああ、あなたの信仰はりっぱです。…」』って…。今日のメッセージの冒頭でも話したように、イエス様が、誰かの信仰を称賛されるというのは、実は、そう多くはありません。しかし、イエス様は、この母親の信仰を称賛されたのです。…ひよっとしたら、この時のイエス様は、この母親の信仰を、弟子たちに見せたかったのではないのでしょうか？…だって、イエス様は、この時、弟子たちの信仰を成長させようと、訓練しておられたわけでしょ？

●イエス様のお言葉に対する「信頼」

実は、この母親と同じように、イエス様が、その信仰を称賛された人物が、もう1人おります。どうぞ、皆さん、できましたら、ルカ 7:1-10 をお聞きくださいます？…そこでも、イエス様のもとに、ある百人隊長がやって来て、そのしもべの癒しを、彼が願っています。そこには、こう記されてあります。『1 イエスは、耳

を傾けている民衆にこれらのことばをみな話し終えられると、カペナウムに入られた。2 ところが、ある百人隊長に重んじられているひとりのしもべが、病気で死にかけていた。3 百人隊長は、イエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、しもべを助けに来てくださるようお願いした。4 イエスのもとにきたその人たちは、熱心にお願ひして言った。「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。5 この人は、私たちの国民を愛し、私たちのために会堂を建ててくれた人です。」6 イエスは、彼らといっしょに行かれた。そして、百人隊長の家からあまり遠くない所に来られたとき、百人隊長は友人たちを使いに出して、イエスに伝えた。「主よ。わざわざおいでくださいませんかように。あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。7 ですから、私のほうから何うことさえ失礼と存じました。ただ、おことばをいただきさせてください。そうすれば、私のしもべは必ずいやされます。8 と申しますのは、私も權威の下にある者ですが、私の下にも兵士たちがいまして、そのひとりに『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをせよ』と言えば、そのとおりにいたします。」9 これを聞いて、イエスは驚かれ、ついて来ていた群衆のほうに向いて言われた。「あなたがたに言いますが、このようなりっぱな信仰は、イスラエルの中にも見たことがありません。」10 使いに来た人たちが家に帰ってみると、しもべはよくなっていた。』

⇒皆さん、分かってくださいますか？…ここでも、イエス様は、この百人隊長の信仰を見て、『このようなりっぱな信仰は、イスラエルの中にも見たことがありません。』とおっしゃっておられますでしょ？…だって、この百人隊長もまた、実際に、そのしもべが癒されたかどうか、自分の目で確認しようとはせずに、ただ、イエス様のお言葉をいただきさせてください！もう、それさえ有れば十分です！』というわけでしょ？…実は、今日のみことばに出てくる母親も、また、この百人隊長も、異邦人だったのです！…今日のみことばで、イエス様が教えてくださっていたように、本当なら、真の神様に対する信仰は、イスラエルから出て、そうして、世界中に広がっていくはずでした。しかし、その「本家本元」であるはずのイスラエルにも見られないような…、模範的な信仰を、異邦人であったはずの母親や百人隊長が持っていたのです。

<励ましの言葉>

ヘブル 11:1 のみことばは、こう教えてくれています、『信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。』って…。皆さん、これこそが、本物の信仰じゃありませんか？…多分、皆さんもよくご存知のはずです。イエス様の母となったマリヤが、イエス様のことを身籠っていた時、マリヤは、親戚であったエリサベツに会いに行きました。その時、エリサベツは、聖霊に満たされて、どんなことを言いましたか？…ルカ 1:45、『主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。』…皆さん、聞いてくださいましたか？聖霊に満たされたエリサベツは、「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人こそが、幸いである！」ということを教えてくれたのです！

正直言って、イエス様も、そういったことを、あの 12 弟子たちに教えようとしておられたのではありませんか？「もしも、あなた方が、わたしのことを正しく、真唯一の神として理解して…、正しく、わたしのことを信じてきたのなら、間違いなく、あなた方は、わたしのことを信頼して、変えられていくはずだ！」って…。そうじゃありませんか？

実は、こういったことこそが、あの 12 弟子たちだけでなく…、私たちの信仰にも足りていない部分ではないでしょうか？…と言いますのも、確かに、私たちは、今日のメッセージの最初のポイントである、真唯一の神様のことを知っているかも知れません。しかし、私たちは、その後に見たような、熱心さと謙虚さを同時に合わせ持っているでしょうか？例えば、ある人は熱心であるけれども、謙虚ではない…。だから、すぐに、神様に脅迫めいたことをしてしまう…。あるいは、その逆で、謙虚なように見えて、熱心さが無いため、すぐに諦めてしまう…。あるいは、祈りっぱなしで、すぐに、その祈った内容を忘れてしまっているとか…。そういったようなことがないでしょうか？

つい先ほど、私は、自分かなりの用心深い人間だとお話ししましたが、皆さんは、いかがですか？…正直言って、これは、私の問題、私の弱点でもあるのですが、果たして、皆さんは、自分自身の目や耳で確認したこと…、神様のお言葉との、どちらを信用されますか？…あるいは、自分自身の常識と、神様の約束と…、どちらが、確実でしょうか？

今日最後に学んだ、神様に対する信頼…、聖書のみことばに対する全き信頼…、果たして、皆さんは、そういったような…、真の神様に対する信頼や確信を持っていらっしゃるでしょうか？天の神様は、そういったような信仰者を喜んでくださるのではないのでしょうか？…どうか、今日の学びを通して、私たちの信仰が益々、天の神様によって成長させられていきますことを期待いたします。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。